

第 130 回芥川賞を読む

盛田 常夫

小説は今の私の守備範囲に入っていない。高校時代にはドストエフスキーなどのロシア文学やゲーテなどドイツ文学を片っ端から読み、日本の私小説批判を展開した中村光夫の持論に共鳴を受けたりして評論文などを書いていたが、大学に入学した途端に社会理論や哲学に興味を持ちだし、以後、小説とは縁のない生活になってしまった。

20歳の若い少女が第130回芥川賞を受賞したというので、一時帰国した時にでも買って読んでみようかと考えていた。そんな折、日本からのお客さんが「お土産に」と、金原ひとみの『蛇にピアス』と綿矢りさの『インストール』を持参された。

短編だから、どれも2時間足らずで読み終えた。読み終えた後、「うーん」と唸るしかなかった。これが芥川賞かというのが率直な感想。とくに、『インストール』は文章も構成も、幼さが残っていて気になった。もっとも、受賞作はこれではなく『蹴りたい背中』だということが分かったのは、読み終えてから。ただ、この『インストール』は高校生の読書感想文で取り上げられる人気一番の小説だと知った。文章も易しいし、扱っているテーマも人間関係も単純だから、今の高校生もゲームや携帯を扱うように読めるだろう。今の若い人が文学に関心をもつきっかけになるかもしれないと考えたりもした。だから、もしかして、これは選考委員の文学者や文芸春秋社の陰謀ではないのかと疑っている。この程度で芥川賞がもらえるなら、「僕だって、私だって」と考える高校生諸君が出てきてもおかしくない。そういうことになれば、文学界と出版社の思うつぼか。案の定、受賞作を掲載した月刊『文藝春秋』が百万部を超え、史上最高の売上だというし、単行本はミリオンセラーに届きそうだ。ビジネスとしては万々歳だろう。もっとも、『文藝春秋』を買うのは高校生ではなく、中年サラリーマンだ。娘の日常生活を覗き見したい父親が買っていくようだ。これも時代の反映だろう。

『蛇にピアス』

二つの小説とも、不登校や引きこもりの少女の生活を描いたもの。引きこもり自体は一つの社会現象ではあるが、同年代の青年たちの日常生活とは離れた、非日常的な生活である。『蛇にピアス』という奇妙な題名の短編は、何のために生きているのか、その実感も意味も見いだせない「私」と、その男友達「アマ」、それからピアスと刺青を仕事にしている男「シバさん」の三人だけの話。三人とも、遊民的なパンク生活を送っていて、「私」はマゾ的だが、二人の男はサドでホモでもある。気怠い毎日の中に、ピアスと刺青とサド・マゾが刺激を与える。

舌にピアスを付け、そのサイズを次第に大きくすると、やがて舌が蛇のように割れるようになる。痛みを耐えて舌にピアスを付ける、背中に刺青を彫る。そこにいたる生活が描

かれる。何故、激しい痛みを耐えてピアスをするのか。奇妙で目的のない日常生活の中で、生きる証は肉体的な苦痛でしか感じることができない。抱かれたまま、首を絞められてもいいような感覚。夢遊病者のような生活感覚。こんな生活の中で、突然、男友達との連絡が付かなくなる。死体で発見された男友達アマの遺体には、ホモセックスの痕跡が。そして偶然に、その痕跡の証拠を、「シバさん」の店の中で見つける。

余りに激しい内容に、中年のお父さんは付いていけず、これでは「お前も読んでみる」と子供に雑誌を渡せないそうだ。だから、単行本では『蹴りたい背中』の半分しか売れていない。学校の先生も、推薦図書とするにはためらうのだろう。とにかく、現代遊民（フリータ）の生活の一部を描いた作品だ。こんな非日常的な生活描写がどうして小説になるのか。もっとも、変哲のない生活は物語にはならない。だから、昔から文人は自らの非日常的な生活や行動を小説にしたのではないか。そういう意味では、この短編も、同じような私小説なのだ。

肉体を傷つけることでしか生きている実感を得られないというのは、物質的な豊かさが生んだ現代遊民の悲劇でもあり喜劇でもある。生きる意味を問うのは青春時代の特権だが、現代の遊民には果てしない無気力が漂っている。我々の学生時代はデモと暴力の時代だった。これも裏から見ると、暴力を通した物理的な力では、生きる意味を見いだせないことの表現だったともいえる。大学に入って間もなく、横須賀で機動隊とぶつかって怪我をした同級生と話す機会があった。端正な顔立ちのこの優男は、後に駿台予備校の名物教師になった人物だが、彼の語った言葉が忘れられない。「機動隊から暴力を受けて、どこまで耐えられるのか。こういう時に、生きているという感覚が得られる」と。要するに、ベトナム戦争とかアメリカ帝国主義とかというのではない。街頭で機動隊とぶつかって、物理的な痛みを感じて、それで生きる証を確かめたい。そういう実存的な欲求だった。トレーンコートを着こなし、サルトルを小脇に抱えて歩く姿は、様になっていた。

1960年代末の全共闘運動は、「第二次安保闘争」とも言われるが、それは部外者が勝手に後付けたまったくの誤解。参加している連中は、ベトナムも安保も関係なかった。暴力を使って暴れたり、逆に機動隊から暴力を受けたりすることで、生きる刺激と意味を見つきたいと考えている者がほとんどだった。同世代人としてこの感覚は理解できないことはなかったが、自分には異質だった。それはピアスで肉体を傷つけたいという欲求に違和感を覚えるのと同じである。

少なくとも、1960年代までは言い表せないような若者の怒りが外に向いていたとすれば、それ以後の若者の焦燥感は内向きになっている。それが家庭内暴力であり、陰湿ないじめであり、おたくであり、多数のフリータ遊民の創出である。我々の時代は日本が貧しさから解放される最中の時代の、団塊の世代が迷い込んだ日々だったが、今は生活の厳しさから免れて無気力化した若者が、ヴァーチャルな生活に逃げ込もうとしている時代だ。その生活の一つの描写が『蛇にピアス』だろうか。

『インストール』

不登校になった私が、「エロ会話」のネットチャットのアルバイトをする小学生と知り合い、彼が学校に行っている間に、チャットの代理をする話だ。設定は今風だが、文章も構成もいまいち。『蛇にピアス』には無理な設定を感じないが、この短編は舞台が展開する毎に設定に不自然さがあり、嘘っぽい感じを拭いきれない。文章表現も携帯メールを読んでいる感覚に襲われる。とても表現力があるとは思われない。

多分、今の高校生の多くは本格小説を読む力も忍耐力もないだろうが、ネットチャットが主要な部分を占めているから、メール交換する感じでの小説を読めるのだろう。いわば「丸文字」世代の文学と考えればよいか。

もう一点。『インストール』のストーリーは、どこかで慣れ親しんだ情景を想起させる。何だったかなとよくよく考えてみると、そう、NHKの番組「中学生日記」だ。最近の「中学生日記」は以前と違い、作り話的な部分が多い。『インストール』はまさにこの最新版「中学生日記」の脚本のような印象を受ける。まさに「中学生日記」そのものなのだ。これなら、中学生日記の脚本をうまく小説化すれば、芥川賞だということになる。「映画化」が企画されているというのも理解できるが、やっぱりこの程度の脚本なら、「自分にも書ける」と考える高校生も多いだろうと思う。

『蹴りたい背中』

前作が「中学生日記」だとすれば、この受賞作は「高校生日記」。同級生から仲間はずれになっている私の心理描写と、「おたく」の男子生徒との奇妙な交友関係が、ほとんどストーリー性のない会話で繋がれていく。こういう小説は非常に読みづらい。もちろん、無為の、気怠い、遊民的青年の高校生活をうまく描いていると言う評者は多いが、私にはただの心理描写が延々と連なっているだけで、ちっとも面白くなかった。多分、多くのお父さんたちは、ストーリー性のない文章を最後まで読みきれないだろう。

やっぱり、前作と同様に、非常に狭いテーマで、「高校生日記」を描いたと見るのが一番正しいような気がする。舞台が高校生になっただけで、基本的なテーマや筋書きは「中学生日記」そのものである。それを悪いと言っているのではない。「中学生日記」の脚本は優れた作品だ。それが芥川賞を獲得したということか。審査委員会の評者が指摘するように、前作の『インストール』に比べて叙述が緻密で、丁寧になっている。それは女子高校生の心理、したがって自分の心理を描くということに焦点を置いているからである。多分、評者たちは前作からの「進歩」という相対的な評価を優先させ、「作家」としての資質を感じ取ったということなのだろう。

『蛇にピアス』より、『蹴りたい背中』を推した評者が多かったのは、前作『インストール』の存在が大きいと思う。しかし、『蛇にピアス』を含め、彼女たちが描いた小説は、そのストーリー性やテーマ、叙述の完成度から見て、芥川賞を受けるほどの深さをもっているだろうか。私には「高校生日記」の脚本という印象から抜けきれない。審査委員会の評

者の一人は、「蹴られるのは私たちの背中のような」と媚びを売るような評を寄せていたが、主人公の「私」が男子生徒「にな川」の背中を蹴りたいと思う以上に、古い団塊世代の私は、この無気力な主人公たちを「蹴りたい」と思う気持ちが強い。

「狭さ」と私小説

文学を生業としている諸氏の多くは、久方ぶりの若手の書き手の登場に拍手喝采しているようだ。これらの諸氏は、テーマの狭さやストーリー性の欠如を批判する人を、あたかも今の若者の世界を理解できない「おじん」か、道徳学者だと言わんばかりの勢いである。

この二人の小説はいわば「自分の語り」を音楽にしたニューミュージックのようなものだ。だから、目くじら立てて、テーマの狭さを批判しても始まらない。ただ、ニューミュージックとしても、本当に評価できるものだろうか。

クラシックのような小説を書こうとすれば、豊富な人生経験や積み上げた勉強も必要だろうし、資料の収集もたいへんだろう。若い人は経験も勉強も足りないから、どうしても身の回りの私事を描くだけになる。しかし、いつまでも「中学生日記」の世界にとどまっていたのでは本格的な小説家にはなれないし、自己体験だけを文章にしていたのではいずれ書くものがなくなってしまうだろう。

彼女たちの続作を読みたいという気持ちは湧かない。ただ、10年経って、彼女たちが書き下ろす小説を読みたい。ただの大衆小説家になっているのか、小説から足を洗って唯の人になっているのか、それとも小説家として成長を遂げているのか。